マジカルワールド３

生時（レジェンド）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マジカルワールド３

【Ｎコード】
Ｎ２７３４Ｗ

【作者名】
生時（レジェンド）

【あらすじ】
あの戦いから１０年……
戦いを求める修羅……
また、新たな伝説が始まる。

序章　伝説の戦士たち

あなたは信じますか？
我々の世界とは別の世界を……
そこでは科学文明はそれほどでもないが、代わりに魔法文明が栄え、
ある者は、自然を操ったり、またある者は、怪我を治す魔法を使ったり、我々の世界では想像上の存在である魔法文明が発達した世界があるのを……

竜王暦５６９年、世界は大魔王に支配されそうになった。
だが、５人の伝説の勇者たちの活躍により、大魔王を封印する事が出来た。

それから５０年後……
善を嫌う悪者たちの手によって魔王は目覚めてしまった。
だが、勇敢な戦士たちによって魔王軍は全滅した。
死を恐れず戦う者たち、それが死戦組だ。
未来の戦士……リュウ・シー・ドーラ
武道家……キャーロット・クーゴ
武道家……土方総司
伝説の戦士……ゴン・ドーラ
未来の戦士……ヴィーナ・スー・ドーラ
武道家……ナイト・サーム・アールケイ
伝説の戦士……マジック・グレー
バトルソルジャー……ダイアナ・シー・ルーナ
賞金稼ぎ……レイラ・オー・ヴォワール
魔女……ギゾラン・コー・スモス
錬金術師……ミスト・ライム・アールケイ
医者……マリー・ミゼール

奴隷……ローズ・スレイヴ
この者たちが死を恐れず魔王軍と戦った死戦組の戦士たちだ。

そして百年の時が流れた。
戦いは終わらない。
だが、新たな敵を新たな戦士たちが倒した。
海戦隊という名の者たちだ。
冒険家……ロウ・コンドン
死神……レイカ・ルー・ナーシー
冒険家……ソージョー・ワーム
バトルソルジャー……ロージア・ブルー
武道家……中岡龍馬
サーツ隊隊長……ラーク・シエル
改造人間……織田ハニー
復讐者……ベジックス・ルーマ
スパイ……レーヌ・ベル・バーラ
この者たちが新たな敵と戦った戦士だ。

それから１０年後……

第1章　戦いを求める者

「しかし、まだ信じられんな～。お前が生きていることに」
そう言ったのは、左頬に傷があり、髪を金髪に染めた１７くらいの少年だった。
「俺がアンタの親父を倒すつもりだったのに……なあ、ハニー」
「私も驚いています。まさか貴方がこの時代にいるなんて……」
「お前の親父のタイムマシンにしがみ付いていたんだが、手を離してしまい、そのまま時空に流され、この時代に来ちまった。それにしても８０万年後の未来が魔法世界になっているとは……魔王やサイエンス星人とも戦いたかったな。俺は……天神流の継承者は、皆修羅になるからな」
「翔さん」
織田ハニーと話していたのは、２２世紀末の天神流２５代目継承者、大空翔であった。
彼は織田軍を追ってタイムマシンにしがみ付いていたが、手を離してしまい、そのまま時空に流され、織田軍やサイエンス星人との戦いから１０年後の時代にたどりついたのだ。

「さて、まずコンドン夫婦に喧嘩を売るか」
「えっ？」
「言っただろう。俺は修羅だ。戦いの中でしか生きられない。さあ、案内(あない)してもらおうか」
「……」

ハニーは止めようとしたが、彼がどういう人間か知っているため、止める事ができず、二人はそのままロウやレイカ、さらにソージョーやロージアがいるカーワ村に向かった。

カーワ村……
ロウとレイカは結婚し、幸せに暮らしていた。
二人が結婚した後、ソージョーとロージアも結婚し、幸せに暮らしていた。

ロウとソージョーは畑仕事をしていた。
そして夕方になると、レイカとロージアが迎えに来るのが日課だ。
「二人とも、お疲れ様」
レイカが微笑みながらそう言った。
そして４人が帰宅しようとした時、ハニーと翔が現れた。
「ハニーさん！」
「お久しぶりです。皆さん」
「あれ、その人は？」
ロウがハニーに聞いた。
だが、彼の中の２５号の記憶が、ふと蘇る。
「翔さん！？」
「何だ？ロウ、知っているのか？」
ソージョーがロウに聞いた。
「僕自身は知らないが、僕の中の２５号が知っているようなんだ」
ハニーは４人に大空翔のことを説明した。
「じゃあ、コイツも過去から来た人間なんだ」
と、ソージョーが言った。
「はい」
「そして、僕たちに戦いを挑んできたんですか」
と、ロウが言った。
「は、はい……」
「ロウだったよね。アンタあの２５号の記憶があるんだろう。なら、俺がどういう人間か知っているよね」
「えっ、ええ……でも、僕らは無意味な戦いはしたくないのです」
「ふーん。２５号は強かった。敵だったけど、嫌いじゃなかった。

たぶんアイツも俺を気にいっていた。天神流を奴は独学で研究していた。奥義だけじゃなく神技(しんぎ)まで……アンタ、俺でも使えなかった神技一天波を使ったんだろう。あれを使った継承者は、開祖の天神斎と18代目の神威龍一だけなんだけどね」

「あの時は夢中で……」

「まあ、戦う気が無い者と戦っても意味が無い」

「すいません」

「まあ、その気になったら、戦ってくれ。（あんたらも戦いの中でしか生きられない、ならば……）あと、ハニーをよろしく」

「か、翔さん、どこへ？」

「ん？強者を求めて旅してくる。お前も幸せになれよハニー」

「えっ！」

「（会えて嬉しかったぜ。幸せになれよハニー）」

こうして翔は旅に出た。

第2章　謎の覆面者

翔が旅に出てから3ヵ月後、イザムラ国のラークから一通の手紙がロウの家に届いた。
「ラークさんからだ」
ハニーやソージョー、ロージアもロウとレイカの家にやってきていた。

手紙にはこう書かれていた。

俺の国で、覆面をした化け物が強いものを狙って、暴れている。
俺も戦ったが負けた。
奴はこう言っていた。
「俺は強い奴を求めている。強そうな奴は俺が潰す。戦いを拒否するものをいるだろう。だが、その気にさせてみせる。どんな手を使ってもだ。たとえ悪になろうと」
とにかくお前たちも気をつけろよ。

サーツ隊隊長ラーク・シエル

ロウたちは思った。
ラークたちをやったのは、大空翔だと。

「僕たちと戦うためにあの人は悪になる気なのだろうか？」
「翔（あいつ）のことを知っているのはハニーさんと、25号の記憶を持つロウ、お前だけだ。アイツならやりかねないか？」
と、ソージョーが汗を流しながら聞いた。
「分からない。ただ、昔あの人がハニーさんのお父さんたちと戦ったのは、正義のためとかじゃなく、強い奴と戦いたいがために、織

田軍と戦っただけ」
「あの人は死戦組の土方様と同じ真の修羅です」
「じゃあ、俺たちがこの前戦いを拒否したが、あの野郎はどんな手を使っても俺たちと戦いたいわけだ」
「戦うしかないのか……あの人と……」
「ちょっと戦って、負ければいいんじゃねえ？」
と、ソージョーが言った。
「戦うことになれば、お互い本気で戦うことになる。あの人は真の修羅だから……手を抜いて戦うことはできない。だが、互い本気で戦えば、下手をすれば、僕か翔さんが死ぬかも」
ロウは少し震えながらそう言った。
「（ロウ君……）」
「どの道、近いうちにあの人は私たちのとこに来る。私たちと戦うために」
ロージアが拳を強く握り、そう言った。
そのとき、外が騒がしくなった。
5人が外に出ると、覆面をした者が、村の者たちを襲っていた。
強いものと戦うためなら、手段を選ばないのは本当だった。
もはやロウたちには戦う道しかない。
果たしてこの覆面と本気で戦い、無事勝つことができるのだろうか？

第3章　覆面との戦い

ロウたちと戦いたいためなのか、覆面は村人を襲っていた。
「翔さん、翔さんでしょう？」
と、ロウが訪ねた。
だが、覆面は何も答えなかった。
「翔（あなた）の望みどおり、僕が戦います。もちろん本気で……でも、これで最後にしてください」
「……」
覆面はロウの言葉にまた、何も答えなかった。
「ロウ君……」
「待てロウ、俺が変わりに戦うぜ」
「ソージョー君、ありがとう。でも僕自身戦いたくなった。きっと僕も修羅って奴なのかも」
少し微笑みながらそう言った。
「ロウ……」
ついに覆面とロウの戦いが始まった。

先に攻撃を仕掛けたのは覆面だ。
素早く重いローキックが左右交互に襲い掛かる。
そして正拳突きがロウの顔を襲う。
だが両腕でブロックをした。

「強い。強すぎる」
「ロウ君」
「ロウ」
レイカとソージョーが大声でロウの名を呼んだ。
そのとき、ロージアがリュウ・シー・ドーラから受け継いだ日本刀をロウに投げ渡した。

「ロウ君」
ロウは刀を受け取った。
この刀は、土方総司が師匠如月勇から受け継ぎ、その後にリュウが受け継ぎ、今はロージアが受け継いでいた刀だ。
ロウは刀を差し、そして抜いた。
ロウは本気なのだ。
そして晴眼の構えから、やや右に刀を開き、刃を内側に向けた。天然理心流、平晴眼と呼ばれる構えだ。
そしてそのまま3段突き、覆面は全て交わすが、最後の突きの時そのまま横薙ぎに変換した。
だが覆面は後ろへ跳んで交わした。
ロウは電撃を放ち、覆面に直撃した。
だが、効いていない。
まだ戦いは終わらない。

「（どうすれば勝てる？）」

覆面が攻撃を仕掛けてきた。
そのとき！
「ちょっと待った！」
と、一人の少年が大声で言った。
金髪に左頬に傷を持つ少年……
そう、大空翔だ。

「翔さん！？じゃ、じゃあ、この覆面の人は？」
「ああ？なんかよく分からんが、お前ら覆面（そいつ）を俺と思っていたのかい？」
「えっ！？は、はい」
「フッ……探したぜ覆面野郎。噂は聞いてるぜ。強い奴を求めてるんだって？俺と同じじゃん。なら、ここからは、俺が相手だ」

そう言って、翔は構えた。
「行くぞ」
一瞬のうちに覆面の間合いに入り、右正拳突きが決まり、覆面は吹っ飛んだ。
覆面は立ち上がり、電撃を放った。
だが、翔の神速の前では無意味だった。
「凄い。まるでテレポートしたみたい」
覆面は宙に浮き、空に逃げようとした。
だが、翔が覆面の片足を捕まえ、そのまま地面に叩きつけた。
だが、覆面も負けていない。
もう片方の足で翔の鳩尾に蹴りを放った。
「グッ……」
体勢が崩れた隙を見て、今度は炎を放った。
「危ね～」
そういいながら、何とか翔は交わした。
覆面は立ち上がり首をコキコキと鳴らした。
そして彼は覆面を外した。
覆面を外した者の顔を見て、ハニーが驚いた。
「リュウ……様？」
覆面をした者はなんと、若き日のリュウ・シー・ドーラにそっくりであった。

第４章　闇の世界の者

覆面の素顔は若き日のリュウ・シー・ドーラやゴン・ドーラに瓜二つであった。

「リュウ様やドーラ様はすでに亡くなられている」
と、レイカが言った。
「まさか時空に飲まれてきたんじゃ？」
と、ロウが言った。
「そんなことどうでもいい。まだ、タイマンの勝負は付いてね～」
と、翔が言った。
そして今まで無言だった覆面をしていた者が語り始めた。
「貴方たちは本物の戦士です。だから、全てをお話します。まず、僕の名前はマルス。僕が伝説の戦士に似ているのは、あの方たちの血を引いているからです」
「えっ！」
誰もが驚いた。
ドーラ一族はすでに途絶えたはず。
それゆえに、彼らの血を引くものがいるはずは無い。
「何から話せばいいかな」
マルスは皆にどう説明しようか考えた。
「まず、僕の祖母はヴィーナ・スー・ドーラです」
「そんなはずは……ヴィーナ様は、魔王との戦いで戦死したはず」
と、ロウが言った。
「祖母の母……僕にとっては祖祖母のダイアナ・シー・ドーラが何故死んだがご存知ですか？」
ダイアナ・シー・ドーラの旧姓はルーナで、リュウと結婚してからも夫や周りの人たちからはルーナさんと呼ばれていた。
「ルーナ様確かご病気で、四十代の若さで世を去ったと聞いていま

す」
そういったのはレイカだ。
「表向きはね」
「えっ？」
「祖母も祖祖父のリュウ・シー・ドーラも祖祖母を罪人（とがびと）にしたくなかったのさ」
「罪人？」
「死者復活の術……今ではこの術を使う事は禁止されている。だが、祖祖母ダイアナは娘ヴィーナを蘇らせたくて、自らの命を使い祖母を生き返らせた」

数十年前……
ルーナはとある洞窟の中で、禁断の魔法、死者復活の術を使い、娘ヴィーナを蘇らせた。
夫のリュウは行方不明となっていた妻ルーナを探し、そして洞窟を発見した。
だが、すでに妻はこの世にいなかった。
「どうして？どうして僕に何も言ってくれなかったの？ルーナさーん！」
「お父様……」
「ヴィーナ……大切な人を取り戻したと同時に、大切な人を失った」
「お父様。お母様を罪人にしないでください」
「あ、ああ……この人は正義の……愛の戦士バトルソルジャーだからな」
「では私はこれで」
「ヴィーナ？どこへ行くんだ？」
「分かりません。ただ、私が蘇ったと世間に知られれば、誰かが死者復活の術を使ったと思うでしょう。私たちは魔王と戦った戦士。だからこそ、お母様を罪人にしたくありません」

そう言ってヴィーナはリュウの前から去っていた。
このことを知る者は死戦組でもこの二人だけであった。

やがて彼女はドーラの名と地上を捨て、地下に潜った。
そこは絶望したものが集まる場所だった。
だが、そんな中、ヴィーナは一人の男性と恋に落ち、結婚し、男児を授かる。
やがてヴィーナの子は大人になり、彼も地下で一人の女性と出会い恋に落ち、結婚し、二人の子を授かる。
その一人がマルスだ。

静かにマルスの話を聞く戦士たち。
「で、俺と同じように強い奴を求めて、地上へ来たわけか。覆面はリュウとか言う奴と間違えられないため」
「覆面はそうですが、地上へ来て強い奴を求めていたのは、僕と共に戦ってくれる戦士を探すためです」
「何？」
「祖母ヴィーナは半年前に、病で死にました。祖母が生きているときは皆祖母の言う事を聞いていました。だが、祖母が死んでからは……僕のように、地下で生まれ、育った子供たちはたくさんいます。光がほとんど無い闇の世界である地下を捨て、地上を支配しようとしているのです」
「マジかよ」
「はい」
「そいつらと戦うためにおめ～は戦士を探していたわけだ」
「そうです」
「そいつらどこにいるんだ？」
「分かりません。でもこの地上のどこかにいると思います。今僕の仲間の一人が情報を集めています」
「ふ～ん……楽しそうだな」

「か、翔さん」
「俺は修羅なんでね」
「貴方のような人がいてくれると心強いです」
と、マルスは翔に手を差し出した。
二人は握手をし、共に戦う仲間となった。
「でも、その前にアンタとの勝負が付いてねー」
「えっ！？」

地下にいた者たちが、地上を支配しようとしている。
果たして、戦士たちはくい止めることができるのか？
その答えは「神のみぞ知る」

第5章　戦いに男も女も関係ない

数日後……
ジュピターというマルスの仲間が、何か情報を得てやってきた。
戦士たちはすぐに会議を開こうと、ロウ夫婦の家へ集まった。
だが、マルスとその仲間、さらに翔やハニーが突如姿を消した。

とある場所……
マルスとその仲間は二人でどこかに向かっていた。
「マルス様いいのですか？強い者たちがせっかく見付ったのに、あの方たちの力を借りなくてもよろしいのですか？」
「ジュピター、あの方たちは結婚し、幸せな家庭を築いている。村の方たちから聞いたのだが、コンドン夫婦には４歳のお子様もおられるそうだ」
「ですが……な、なら、あなたも残ってください」
「何？」
「お願いします。あなたは私より強い。ですが、あなたは……あなたは、女です。戦うのは男の役目。ですから」
「ジュピター！私はもう女を捨てたのだ。祖母と同じ名のヴィーナの名と共に」
なんとマルスは女性であった。
本当の名は祖母と同じヴィーナ……
だが、彼女は女であることを捨てると同時に、その名前を捨て、マルスと名乗っているのだ。
その時だった。
二人の後ろから彼らに話しかけてくるものがいた。
「女みたいな男かと思わせといて、本当は女だったとはな」
話をかけてきたのは翔だ。

隣にはハニーもいる。
「翔さん」
「俺は独り者だし、強い者たちと戦いたい」
「ですが、あなたは、この時代の者ではないのでしょう」
「ああ、そうだ。だが、死戦組の土方総司や海戦隊の中岡龍馬も過去から来たものだが、命を捨てて戦った」
「そうですが……」
「それにこの世界に詳しいハニー（案内人）を連れてきてやったんだ」
「ジュピターが言いましたように、戦うのは男だけで十分です」
「おいおい、アンタの祖母や他の女の者たちも、魔王や異星人たちと戦ったんだろう。戦いに男も女も関係ね～」
そして翔はこう言った。
「それに俺もアンタと同じだ」
「えっ？」
「俺も女だ。なあ、ハニー」
「はい」
「俺の前の名前は楢崎佐那」

22世紀末……
楢崎家の長女として彼女は生まれた。
彼女の近所にはしばらくアメリカにいた織田家も住んでいた。
ハニーは佐那の一つ上だ。
二人は仲が良く、よく遊んでいた。
ある事件が起きるまで……

佐那の父親は正義感の強い警察官だった。
だが、そのため、恨みを持つものもたくさんいた。
そして、そのもの達が、楢崎家を襲った。
父、定吉は命がけで、妻と当時まだ5歳だった幼い佐那を守ろうと

したが、斬殺された。
また、１０歳上の兄がおり、剣の達人であったが、彼も斬殺された。
定吉の妻でもあり佐那の母も佐那を守り惨殺された。
佐那にも刃が襲い掛かった。
だが、そのとき、彼女を助けたものがいた。
天神流２４代目大空翔だ。
一瞬で賊を退治した。
その後孤児となった佐那を彼は引き取り弟子にした。

それから１０年後……
佐那は師匠の翔に好意を抱いていた。
二人の年の差は１２も離れていた。
だが彼女は自分の思いを師匠の翔に伝えた。
翔は迷った。
自分は２７歳だが、佐那はまだ１５歳だ。
だが、天神流を教えた事により、彼女の女の幸せを奪ってしまったという後悔もあった。
そのため翔は彼女の想いに答えた。
だが、二人が恋人でいられた時間はそう長くは無い。
佐那が１７歳になった頃、ハニーの父親が人造人間を使って、世界を支配しようと人類に争いを仕掛けてきたのだ。
この戦に翔も佐那も参加した。
織田はすでに二十四体の人造人間を作っていた。
翔は2号から１０号までを粉砕した。
だが、他の人造人間が佐那を、襲ってきた時に、彼が盾となり彼女を守った。
「師匠！」
瀕死の状態にもかかわらず、襲ってきた人造人間１３号も粉砕した。
「師匠」
「さ、さな……逃げろ」

「な、何を言っているんですか。死ぬ時は一緒ですよ」
「グッ……よ、よく聞け、佐那……お前は、す、すでに天神流の後継者になれるほどの強さを持っている。だ、だが、跡を継がせなかったのは、お、お前をいつか、普通の女に戻すためだ。お、俺ではお前を幸せにするどころか、不幸にしてしまった。こ、これからは女として生きて、幸せになってくれ」
「師匠、私はあなたといた12年間、これ以上の無い幸せを貰いました。だから」
その言葉に翔は微笑み、息絶えた。
「師匠！！」
そのとき、佐那の前にハニーが現れた。
「ハニー」
「ごめんなさい」
「お前が謝る事なんてない」
「でも佐那ちゃん」
「たった今から、私は……いや、俺はその名と女であることを捨て、天神流25代目を次いだ、大空翔だ」
「佐那ちゃん……」
「師匠は2号から10号までと今襲ってきた人造人間を倒した。残りは俺が倒し、そしてハニーには悪いが、織田秀吉の首を取る。まず、1号からだ」
その言葉にハニーは下を向いた。
佐那……いや、翔はハニーが1号だという事を知らない。
「佐那……いえ、翔さんに殺されるなら本望です」
ハニーの言葉に翔の目付きが鋭くなった。
「ハニー、さっきも言ったようにお前は悪くない。悪いのは織田秀吉と奴が作った人造人間だ」
「私が人造人間1号です」
「あっ？」
「正確には改造人間です」

「お前まさか、親父に」
「はい」
「あの野郎！自分の娘を……ゆるさね～」
その時だった。
爽やかな青年が翔たちの前に現れた。
「何だ？てめ～」
「翔さん、気をつけて、ソイツは父が作った人造人間２５号よ」
「２５号！？また一体作りやがったのか」
「１号は優しいからな。織田様の敵でも殺す事ができぬか」
「おい、ハニーを１号なんて呼ぶな」
これが大空翔と２５号の始めての死闘であった。
そして２時間後……
「強いね。君」
「けっ、お前もな」
「君は僕が殺すから、他の人造人間に殺されないでよ」
「ああ？」
「じゃ～ね。天神流２５代目」
そう言って２５号は去っていった。
「アイツ、強いが、他の人造人間とは違うな」
「えっ、ええ」

それから１年後……
織田軍は負けを悟り、２５号を含めた５体の人造人間を連れて、気球型のタイムマシンで未来へ逃げようとした。
「何だあれは？」
翔はとっさにタイムマシンにしがみ付いた。
だが、途中で手を離し、織田軍やサイエンス星人たちとの戦いから１０年後の未来へたどり着いたのだ。
翔の話をマルスとジュピターは静かに聞いていた。

「そうだったのですか。なら僕も隠し事はもうしません。今回の首謀者は僕の兄アポロンです」
「お前の兄貴が首謀者か」
「はい。ですからハニーさんの気持ちがよく分かります。兄は伝説の戦士の血を引くものが、何故闇の中で生きなければならないのかと、不服を抱いていました」
「まあ、分からないでもないが」
「兄は、祖母が亡くなってから、地上に憧れを持つ若者を連れて、そして地上を支配するつもりです」
「で、お前の兄貴の居場所は分かったんだろう」
「居場所までは分かりませんでした。ただ、ある老人が紅い瞳をした男が若い者を何人も連れて、巨人を探していると教えてくれました」
「巨人！」
ハニーが大声で叫んだ。
「ハニー、何だその巨人というのは？」
「かつてのヨーロッパ大陸、この時代ではメルベイユ王国というのですが、１０万年くらい前にその国で大きな戦争が起こり、その兵器として作られたのが、その巨人だと思います」
「かつてのヨーロッパ大陸って、随分遠いな。だが、ハッキリしたな。その巨人を使ってこの世界を支配するつもりだ」
「でも、その巨人を動かすには鍵がまず必要だと聞いたことがあります」
「その鍵はどこにあるかハニーも知らないんだ」
「はい……一説によれば海の底とも言われていますし、ある山の頂上にあるとも言われています。あるいは、もうこの世界には無いとも言われています」
「まあ、奴らはメルベイユ王国だっけ？そこに向かっているだろうから、そこに行くか？」
「はい……翔さん、ハニーさん本当にありがとうございます。ジュ

ピターもご苦労でした」
「い、いえ」
「（コイツ、この女の事が……）」
４人はかつてのヨーロッパ大陸、メルベイユ王国に向かうこととなったのだ。

第5章　戦いに男も女も関係ない（後書き）

天神流の継承者たち

初代・・・天神斎
２代目・・・陽炎（お光）
３代目・・・影丸
４代目～１０代目不明
１１代目・・・辰巳
１２代目・・・不知火蛍
１３代目・・・不知火彦斎
１４代目・・・不知火幻次
１５代目・・・月形十蔵
１６代目・・・月形良昭
１７代目・・・月形瑠奈
１８代目・・・神威龍一
１９代目・・・大空達也
２０代目・・・不明
２１代目・・・大空？
２２代目・・・大空龍一
２３代目・・・不明
２４代目・・・大空翔
２５代目・・・大空翔（楢崎佐那）

天神流を学んだ者たち

黒龍（佐吉）
晋作
彦斎の子供たち

不知火　灯
隼人の祖父、父、母
不知火　隼人
堀辺　正宗
武田　武
水谷　凍矢
凍矢の影の者たち（春麗など）
神威　聖華
神威　龍之介
土方総司（独学）
中岡龍馬（独学）
リュウ・シー・ドーラ（未来の自分やナイトらから学んでいる）
ヴィーナ・スー・ドーラ（リュウと同じ）
２５号（独学）
ロウ・コンドン（２５号の記憶を持っているから）
ナイト・サーム・アールケイ（土方総司から学んでいる）

第6章　メルベイユ王国

４人はメルベイユ王国に来ていた。
船や他の乗り物も乗らずに来たのだ。

「さすがの俺もお前らの体力には驚きだぜ」
４人はマジカール王国から飛んできたのだ。
マルスの背中にハニーを乗せ、ジュピターの背中に翔を乗せ、途中イザムラ国とサイエンス王国で休憩をしたが、それでも5日でマジカール王国からメルベイユ王国まで来たのだ。
「初めてマジカール王国からイザムラ国に行った時は、地図が小さいから海というのも狭い物だと思っていました。けど、いざ渡ったらあまりの広さに驚きでした」
少し疲れた顔をしているがマルスは笑顔でそう言った。
町に行く前にハニーはある物を皆に渡した。
それはマジカール王国だけでなく、この世界全ての言葉が話せる超ホンヤックの実だ。

そして４人は宿を捜し歩いた。
すると二十代前半の青年にハニーがぶつかった。
「すみません。大丈夫でしたか？」
と、優しく手を差し伸べるハニー
「こちらこそすみません」
青年はなかなか感じのいい青年であった。
だが、彼は何者かたちに追われていた。

「見つけたぞ」
「何だお前ら？」
挑発的な態度の翔。

「旅の者か？おとなしくその男を渡すのだ」
六十代～七十代くらいのお年寄りがそういってきた。
「彼は悪魔に取り付かれておる。今はおとなしいが夜になると……特に満月の夜などは大暴れをするのだ」
「ふ～ん。なら俺が大暴れしてやろうか？」
「うっ……皆の者、今日は引きましょう」
８人くらいの集団はおとなしく去っていった。

「よろしいのですか？」
「今宵は満月。あの者たちもアイツが悪魔になったら、おとなしくするだろう」
「はい」
「（しかしさっきの少年、何て恐ろしい目をしておるんじゃ。まさかあの者も悪魔に……）」

４人は青年の家でお礼の昼食をいただいていた。
「うまかった～」
「本当ですね」
「ご馳走様」
「あのう、あの者たちは何者ですか？」
と、ジュピターが聞いた。
「悪魔祓いです」
一瞬険しい顔で彼はそう言ったが、すぐに微笑み自分の名前を名乗った。
「ゴットン・シェン・ロールです」
「どうも、大空翔だ」
「織田ハニーです」
「マルスです」
「僕はジュピター」
「私は夜になると悪魔に取り付かれるみたいなのです」

「えっ？」
「ですから、日が暮れる前にはお引取りを。いい宿屋を紹介します」
その言葉を聞いて翔が黙っていない。
「悪魔！？おもしれ～」
「何を言っているのですか！私は……悪魔はこの村人たちを何人も殺害したんですよ」
「なら、何故あの悪魔祓いから逃げた？」
「あの方たちでは私の中の悪魔を退治できない。だから、誰か私を救ってくれる人を探すために逃げたのです」
「救ってやれるかは分からんが、悪魔を退治してやろうか」
「私を殺してくれるのですか」
「いや、俺はただ、悪魔と戦いそして勝つ」
「（何だこの少年の目は……もしかしたら本当にこの人なら）」

そして昼から夜へ
太陽から月へと変わった。
ゴットンが苦しみ始めた。
「マルス様いいのですか？」
「兄上たちと戦う前に、あの方がどれほど強いかもう一度確かめたい」
「うお～！！！」
「ゴットンさん」
ハニーが叫んだ。
「俺様はゴットンじゃね～」
さっきまで穏やかな顔をしていたゴットンだが、今は恐ろしい表情へと変貌した。
「俺様の名はマージュ・ピコールだ」
と、彼が言った瞬間翔がゴットンを……マージュを殴った。
「お前が悪魔となった時から勝負は始まったんだよ」
「フッ……面白い餓鬼だ」

「てめ〜が悪魔なら俺は修羅だ」

悪魔に乗り移られたゴットン。
修羅へ覚醒した翔。
果たして勝者は悪魔かそれとも修羅か。
激しい戦いはもう始まっている。

第7章　悪魔対修羅

窓を破り二人は外に出た。
ハニーたちも急いで外に出た。
当然村の者たちは騒ぎ始めていた。

「神父様止めなくてよろしいのですか？」
「……わしらでは出来ぬことを、あの少年なら出来そうな気がする」
「えっ？」

マージュは武器屋に入り剣を持ち出した。
そして手から氷柱を出して、翔に攻撃した。
だが、彼女は横に避けた。
だが、マージュは彼女の間合いに入っていた。
そして剣を抜いた。
交わすことができず、胸元を1寸斬られた。
当然さらしも斬られたため、胸が丸見えとなった。
「おいおい、お前女だったのか」
翔は胸を隠そうともせず、微笑んでこう呟いた。
「強いな～」
それを見ていたマルスは、
「（僕だったら胸を隠そうとしただろう）」
そう思った。

村の若い者たちははしゃぎだした。
「ストリップだぜ！」
「どうせなら全部脱げ」
「フッ……俺の裸が見たいのかい？いいぜ見せてやるよ」
そう言って服を破り脱いだ。

「お、おいアイツの背中」
「何だあれは？」
翔の背中には闘神阿修羅の入れ墨が彫られていた。
「三面六臂の闘神阿修羅だ。三つの顔は怒り、悲しみ、意思を表している」
「チッ……あしゅらだか何だが知らんが、悪魔の俺は負けねえ～」
そう言って手から炎を出し攻撃しようとした。
だが、翔は炎の出ている手首を掴み捻らせた。
そのため炎はマージュの顔に飛んできた。
「ぐわ～」
すぐに水の魔法で火を消した。
すると彼の様子がおかしくなった。
「また僕は悪魔に乗っ取られていたんですね」
どうやらゴットンは元に戻ったようだ。
だが、翔は納得いっていないようだ。
「こら！まだ勝負は付いてねえ～。それとも負けを認めるのかよ悪魔野郎」
「翔さん、もういいでしょう」
と、マルスが言った。
そのとき、またゴットンが苦しみ始めた。
そして、再び悪魔に乗り移られた。
「俺様の負けだ」
なんと悪魔は敗北を認めた。
「俺様も３００年位前までは人間だった。そのときから俺は強かった。多くの人間を殺した。そして斬首刑された。そしてその斬首を行った者の顔がコイツに似ているんだよ。しかもコイツは俺の嫌いな善だとか、愛だとか、正義だとか言いやがる。俺はすでに悪霊（ドゥーサ）になっていたから、乗り移って奴の体で人を殺し、悪行を行なってやったのさ。だが、奴はそれでも正義なんてモノを信じていやがる。そのため俺は……俺には奴の記憶が全て残る。そのため俺様自身愛

や正義というものを信じたくなった。もうこの世に未練は無いさあ、神父よ俺を霊眠してくれ」
「うむ」
「待った」
そういったのは翔だ。
「俺たちはあるもの達と戦うため強い奴を探している」
「（翔さんの場合は強い奴と戦いたいだけなんだけど）」
とハニーは思った。
「神父さん、悪魔も悪霊も俺が倒したんだ。好きにさせてもらうぜ」
「し、しかし」
「あっ？」
鋭い眼光で神父を睨んだ。
「いいだろう。お前らの仲間になってやる」
「じゃが、ゴットンの意思も聞かんことには」
「ゴットンの奴は正義感の強い男だから、聞く必要も無い。闇の中でしか体を乗っ取れん。ゴットンは俺が乗っ取っている間は記憶が無い。日が昇ったら、詳しく教えてやりな」
「ああ」
「しかし、お前いい乳してるぜ。さらし巻くのはもったいない」
「フッ……こんな裸でよければいつでも見せてやるよ」
「そうかい」

悪魔との戦いが終わり日が昇り始めた。
戦士たちはゴットンに全てを話した。
「そうですか……私は戦いは好みませんが、もしかしたらこれも神のご加護……いいでしょう」
そして仲間に加わったのだ。

第8章　くだらない事に悩む自分にさよなら（前書き）

今回の話は僕自身のために書いた話です（詳しい事はあとがきに書きました）

第8章　くだらない事に悩む自分にさよなら

とある場所で、アポロンたちはある計画を行なおうしていた。

「ぐは～……」

一人の若い男性が人気のない森の中で、アポロンに殴られた。

男は強盗を行なって、逃走中だった。

その時に、近くにいたアポロンに殴られたのだ。

「アポロン、コイツでいいんじゃないのか？」

と、アポロンの同志の一人が言った。

「ああ」

赤い瞳をしているアポロン。

その目は冷酷な目をしていた。

「お前の体、我らが貰う」

「なんだと！？」

男は逃げようとした。

だが、足を氷の魔法で凍らされてしまった。

「お前らはコイツを追っている奴らに邪魔されないように見張っとけよ」

「ああ」

「な、何をする気だ」

「お前の体を使って、死者復活の術を行い、１００年前に我が先祖たちによって死んだ魔王を甦らす」

アポロンは祖母ヴィーナのいない所で、密かに禁断の術を研究していたのだ。

もちろん、実際に試すのは今回が初めてだ。

「しょ、正気か？」

「この世界を我らのモノにするためなら、何でもする」

男を中心に魔方陣を描く。

そして、死者を甦らす儀式が始まった。

その頃戦士たちは、ウィンカール町という所にいた。
この町は音楽の町だ。
２１世紀にあるピアノやヴァイオリン、ギターに似た楽器があり、町の人間はよく集まって演奏会が行なわれている。
ハニーはここにあるほとんどの楽器をプロ並みに弾ける。
ギターのような楽器を弾き始めると、翔が唄い始めた。
２０世紀から２１世紀に活動した、あるバンドの曲を二人は奏でた。
２２世紀末の頃、二人がまだ幼い頃、翔の父、楢崎定吉がよく歌っていた歌だ。
「この曲は遺書なんだよ。くだらない自分にさよならするという意味で、俺たちがいる時代から、２００年も前の、２０世紀末に、作られた曲だ。俺は警察仕事(こんな)しているから、いつ死ぬか分からね～。だからこの曲は俺にとっても、遺書でもあるんだよ」
と、定吉が言っていたことを思い出し、二人は奏でたのだ。

By the time I knew. I was born
Reason or quest. not being told
What do I do. What should I take
Words “God Only Knows” won、t work for me
Nothing starts Nothing ends in this city
Exists only sever lonesome and cruel reality
But still I search for light
I am the trigger. I choose my final way

Whether I bloom or fall is up to me

（LUNA SEA の「ROSIER」（MCAビクター）より一部抜粋）

生まれた事を知る時
理由か探求か知らなかった
僕が何なのか、何をすべきか
「神のみぞ知る」という言葉は
僕には意味がない
この街は始まりも終わりもない
孤独と残酷な現実
それでも僕は光を探す
僕は引き金
咲くか散るかは僕が決める

訳　生時

歌詞は当然周りの者たちには聞いたことのない言葉だ。
だが、音楽に言葉なんて関係ない。
周りの者たちは感動し、涙を流し、拍手した。
「くだらない事で悩んでいる自分にさよならし、新たな自分を生み出し、生きてくれ！！」
と、翔は大声で言った。
そのとき、一人の青年が翔に近づいて、こう言った。
「僕は難病を抱えていて、そのために病気や仕事で悩んでいました。いつか、あなたが言ったように、くだらない事で悩んでる自分にさよならできるように頑張ります」
「おう、頑張れよ」

しばらく拍手は鳴り止まなかった。
戦士たちのほんのわずかな休息であった。
アポロンは魔王を復活させようとしている。
戦士たちはアポロンと戦う戦士と巨人の鍵を探しに町を出た。

第8章　くだらない事に悩む自分にさよなら（後書き）

どうも生時です。
ここ数日マジでやばかったです。
痛みと不安との戦いでした。
仕事　（バイトだけど）もほとんど行っていないので、もう辞めようかと思うほどでした。
そして今回の台風……
非難指示が出されて、大変でした。
僕の地元は１１年前の台風でかなり大変な事になっていたので……
（僕はそのとき入院していましたが）
でも、東日本大震災で被害に遭われた方たちは懸命に生きています。
だから僕も頑張らなければいけないと思います。
今回の話は僕自身のための話です。
明日から新たな自分に生まれ変わります。

最後に、半年前の震災、そして今回の台風で亡くなられた方たちにご冥福お祈りいたします。

生時

P．S．
今回僕の好きなＬＵＮＡ　ＳＥＡの「ＲＯＳＩＥＲ」の歌詞を一部抜粋しました。
この曲の原曲者であるベースのＪさんは、くだらない自分にさよならするための遺書だそうです。
そのため英文のところは隆一さんじゃなくＪさんが歌って（語って）います。
訳は、僕が昔、英語のできる方と一緒に訳したので間違っているか

もしれません。

第9章　新たな出会い

戦士たちはイギランスという町に来ていた。
ここは国の中でも一番大きな町だ。
そしてここに巨人があるのだ。

「これが巨人か」
巨人は57メートルあり、形はアニメなんかに出てきそうな形をしていた。
「それにしても、マルスの兄貴たちはこの辺にいなさそうだな。
と、翔が言った。
まさかアポロンたちが魔王を復活させよとしていようとは、戦士たちは思いもしないだろう。
「どうやって中に入るんだろうな」
ハニーも巨人についてはあまり知識がない。
「こうなったら、アポロンたちが鍵を見つけてもいいように、巨人(コイツ)壊そうぜ」
と翔が言った。
「ダメですよ。この巨人は今は国の守り神なんですから」
と、ハニーが言った。
「それに壊すといっても、どうやって壊すんですか？さすがの翔さんでも巨人(これ)は壊せないでしょう」
と、ジュピターが言った。
「う～ん……確かに無理だな」
「10万年前に作られた兵器ですものね」
マルスがそう言った。
「そういえばこの町に2週間くらい前、よそ者が倒れていたと、噂で聞いたことがあります」
そう言ったのは、ゴットンだ。

「よそ者？」
「はい。格好はもちろん言葉もこの国の言葉ではないようです」
そのとき、若い男女が3人のチンピラに絡まれていた。
男の方は甘いマスクに小柄な体型で、この国、いや、この魔法世界では珍しい格好をしていた。
髪は黒髪を結って、服は羽織袴を着ていた。
女の方の髪は金髪で蒼い瞳をして、服装はこの国の女性が着ている服を着ていた。
二人とも年は二十歳前後だ。
「おい、ハニー、男の方は間違いなく日本人じゃないのか？」
「ええ、もしそうなら、あの方も過去から来た可能性があるわね」
「おい、ニーナ、いい加減ジョーカーさんの女になれよ」
チンピラの一人がそう言った。
「何度も嫌ですと断っているでしょう」
と、ニーナという名前の女性が言った。
そして男もこう言った。
「嫌がっているじゃないですか」
だが、彼の言葉はこの世界の言葉ではなかった。
彼の言葉は明らかに日本語だ。
「ああ？何言っているか分からね～。よそ者（モン）は黙っとけや」
すると話しかけた男が急にお腹を抱えうずくまった。
「うっ……」
「おい、ピーラどうした？」
「腹が急に……クソ……、おい、一度引き上げだ」
そう言って3人は去っていった。
そして戦士たちは男女に話しかけた。
「大丈夫ですか？」
そう言ったのはマルスだ。
「はい、運よく腹痛を起こしてくれたみたいで」
「バチが当たったのでしょう」

と、ジュピターが言った。
「フン……運ね～……確かに運かもな」
と、翔が言った。
そして翔は日本語で男にこう言った。
「アンタ日本人だろう！？しかもかなり強い」
男も日本語で答えた。
「君も日本人みたいだね」
「ああ……ハニー超ホンヤックの実まだあるか？」
「はい」
ハニーは男に超ホンヤックの実を渡した。
「ソイツを食べれば、お前さんもこの世界の言葉が話せれるようになる」
「へ～、便利な世界だな」
そういいながら男は実を食べた。
「僕の言葉分かる？」
「フーアム、話せれるようになったのですね」
フーアムとはこの国の言葉でよそ者という意味だ。
そしてお互い名乗りあった。
「僕はマルス」
「僕はジュピターです」
「私はゴットン・シェン・ロール」
「私は織田ハニーです」
「俺は大空翔だ」
「私はニーナです」
「僕は岡田半次郎」
「フーアム、そういう名前だったのね」
「はい」
「岡田さんよ。俺は22世紀からこの時代に来たんだが、アンタは？」
「僕は21世紀……2010年に有名な人に会いに行ったら、暗闇

に飲まれました」
「有名な人とは、２１世紀に活躍していたジャッキー・リーさんですね」
と、ハニーが言った。
「はい」
「なるほど。大方その人のサインでも貰いに行ったときに飲み込まれたんだろう」
「ここは一体どこなんですか？」
翔たちは岡田やニーナに説明した。
そしてこれから起ころうとしていることも伝えた。
「よく分かりました」
「それにしても、フーアム、いえ、岡田さんが過去から来たなんて」
「僕は暗闇に飲まれてこの時代のこの国に来たんですが、着地を失敗して、倒れているところを、こちらのニーナさんに助けていただいたのです」
「なあ、岡田さん、アンタ俺たちの仲間になれよ」
「えっ？でも僕では足手まといになるだけです」
「俺が、このニーナに運がいいと言ったのは、さっきのチンピラは偶然腹痛を起こしたんじゃない。岡田が神速で鳩尾に拳を繰り出していたからだ。この男と一緒だったから助かった。だから運が言いと俺は言ったんだ」
「そうだったんですか」
とマルスが言うと翔はこう言った。
「クスッ……伝説の戦士の血を引いているお方が見えなかったのかい！？」
「は、はい」
「本当ですか岡田さん」
「えっ！？ぐ、偶然だよ」
「フン、そういうことにしといてやるよ」

また一人過去から来た者がいた。
だが、岡田半次郎にはまだ謎があるようだ。

第9章　新たな出会い（後書き）

本編では名前しか出ていないジャッキー・リーについて少し説明します。

ジャッキー・リー（本名：嘆龍（タン・ロン）１９７３年７月２０日―？）とはサンフランシスコで生まれた中国人、俳優、武道家である。

１９７３年７月２０日伝説の龍が大空へ昇った年に、にサンフランシスコで生まれる。

彼が幼い頃には香港で暮らしている。

幼い頃に父親から太極拳を学び、その後謎の老人から詠春拳を学ぶ。

兄弟子にはサモハン・ユンピョウという武道家がいる。

２０００年、彼が２７歳の頃に兄弟子と共に役者を目指し始める。

２００４年、「スパルタン・ホーネット」という格闘映画で兄弟子が主役、彼が準主役として出演。

２００５年、「プロジェクトイーグル危機一髪」で初の主役出演。

２００７年、「ポリス怒りの鉄拳」で香港で大ヒット。

２００９年、「燃えよ酔拳」でハリウッド進出。

２０１０年、「龍拳遊戯」の撮影段階で時空に飲まれる。

名前のモデルは作者の生時が尊敬する、ブルース・リーとジャッキー・チェンである。

第１０章　人斬り

戦士たちはニーナの家に案内された。
彼女は病弱な母と二人暮らしだったが、今は岡田もこの家で暮らしている。
戦士たちは今後について話し合った。
その時、翔が客間の隅に置かれているあるものに気づいた。
あるものとは日本刀であった。
「翔さん？」
と、ハニーが言い寄ってきた。
「この刀、真剣だ。２１世紀の人間が日本刀（こんなもの）持ち歩くとは、やはり只者ではない。う～む。刃こぼれもしている。そしてこの刀と岡田（アイツ）からは血の匂いがする」
「スイマセン、その刀形見なんで」
「えっ？ああ……すまん。いい刀だなと見惚れていた。なあ、岡田さんよ、アンタはこの刀で人を斬った事があるか？」
「はあ？何を言い出すんですか」
その時だった。
外が騒がしくなった。
道の真ん中で３人の若者が女性を人質にして、金（マーネ）を要求していた。
戦士たちや岡田、ニーナも外に出た。
「あいつらはさっきのチンピラ共だ」
「助けて～」
「リリーちゃん！」
大声でニーナが叫んだ。
「知り合いか？」
「はい。幼馴染です」
「ピーラ、ニーナだ」
「ああ、あのフーアムもいやがる」

「もう、誰も殺したくないのに……争いなんかしたくないのに」
岡田が下を向いて小声でそう言った。
そして彼は家から刀を持ち出してきた。
「みんな、いいか、誰も手を出すな」
「翔さん、でも」
「いいから黙ってみてようぜ」
「その娘を放せ。僕はもう無意味な戦いはしたくない」
「はあ？てめ～のせいで、ニーナを逃がしちっまたから、俺らジョーカーさんから１００万マーネ持ってこいと言われているんだ」
「僕がそのジョーカーを倒す。だから」
「うるせ～！俺たちも楽しんでいるからいいんだ」
「おい、そういえばコイツ、言葉が話せるようになったみたいだな」
「それがどうした。いいか俺たちはブーギョ隊も恐れね～人間だ」
ブーギョ隊……我々の世界の警察のようなもの。
国によって、リスポ隊、サーツ隊など、呼び方が違う。

「言葉は通じても、僕の想いは通じないか」
「当たり前だ。オラ～この女殺されたくなければマーネ持ってこい」
「最後のチャンスだ。１０秒以内にその娘を放せ」
「うるせ～」
「１、２、３、４、５……」
「おい、あのフーアムを殺れ」
「ああ」
残りの二人が岡田に襲い掛かってきた。
「８、９、１０……馬鹿共」
彼の目が鋭くなった。
気の質も変わった。
まるで別人だ。
「今からのお前らの相手は岡田半次郎じゃなく、人斬り夜叉が相手する」

そう言って、刀を抜くことなく、鞘のみで、敵の二人に重い一撃をそれぞれ与えた。
「ぐわ～」
「いて～」
「チーン、カース……クソ野郎」
「お前のその首を刎ねてやろう」
そう言って鞘から刀を抜いた。
「（や、やばいぞコイツは……ジャーカーよりやばい……）」
「どうするんだい？チンピラの兄ちゃんよ。夜叉と修羅のどちらかを相手するかい？」
「翔さん」
「（コイツも恐ろしい目をしている）分かった。俺の負けだ」
「ジョーカーという奴はどこにいる？」
「ここより西へ行くとボロイ小屋がある。そこにジョーカーと５０人の仲間がいる」
「そうか。これからは更正してまともに生きろよ」
「あ、ああ」
３人はブーギョ隊に連行された。
野次馬たちも去っていき、いるのは戦士たちとニーナと岡田だ。
「さて、岡田さん。いや、人斬り夜叉、今度は俺とアンタとの戦いだ」
「僕は無意味な戦いはしたくないんです」
「じゃあ、何故人を斬ってきた？」
他の戦士たちは驚きのあまり言葉が出てこないようだ。
「岡田さんが人斬り」
「スイマセン。ニーナさん。こんな僕を助けてくれて……２１世の頃僕は人斬り夜叉と呼ばれ、多くの人を斬ってきました。ジャッキー・リーさんもある組織から暗殺の依頼が来たので……でもそのとき暗闇、いや、時空に飲まれこの世界に来た……そして僕はもう人を殺さないと決めたんです。この世界で平穏に暮らしたい。ですか

ら翔さん、あなたとも戦えない」
「だが、俺は戦いたい。天神流２５代目としてな」
「天神流！そうでしたか……２２世紀末まで伝わっているんですね」
「ああ」
「天神流１７代目月形、いや、神威瑠奈さんはジャッキー・リーを除き、僕が唯一殺せなかったお方です」

月形瑠奈……天神流１７代目。
神威龍一の師匠でもあり、妻でもある。
また、表向きは喫茶店を経営しているが、裏社会ではアルテミスと呼ばれるプロの始末屋（スイーパー）でもある。

「そうか。１７代目と戦ったことがあるんだ」
「はい」
「なら１７代目を殺せなかった分、２５代目（オレ）を殺してみないか？」
「お断りします」
「そうか」
「それより、ジョーカーたちの退治に僕は行きます」
「もちろん俺も行くぜ」
「私も行きます」
「ニーナさん、いけません。危険すぎます。それにお母上の近くで面倒を見てあげてください」
「ジョーカーは、しつこく私を狙ってきました。ですから私はその男を見たい」
「おい、ハニー」
「はい」
「あと、マルスとジュピター、ゴットンたちはおばさんの面倒を診てやれ。俺と岡田とニーナとで悪者退治してくるわ」
「翔さん」
「ほら、行くぞ。ジョーカーの次は夜叉（アンタ）だから」

「えっ！？」

３人はジョーカーたちがいる小屋へ向かった。
だが、魔王が復活しようとしている。
だが、そのことをまだ戦士たちは気づいていない。

第１１章　夜叉対ジョーカー

戦士たちはニーナの家に着いた。
中ではニーナの母が水晶玉で占いをしていた。
「大丈夫ですか？」
「ゴホッ……だ、大丈夫です。ニーナや岡田さんたちが無事帰ってこれるか、この水晶で見ていたのです」
敵のアジトでは……
大きくてボロイ小屋の外には３０人のチンピラが、中には２０人。
そしてジョーカーがいる。
「やれやれ、チンピラごときに負けていたら、アポロンたちには勝てんからな～」
「翔さん、僕が相手をします。その間あなたはニーナさんを守っていてください」
「ああ、いいよ（またアンタの強さ見せてもらうぜ）」
そして、岡田は神速で３０人に向かっていった。
刀は抜かず鞘だけで戦っているが、物凄い強さで、次々とチンピラたちを倒していく。
「（そういえば、幕末時代に薩摩藩の示現流の使い手、人斬り半次郎なんて武士がいたっけな～）
まだ、１０人近くいるが、彼らは恐怖で動けない状態であった。
そして３人は中に入った。
奥の方で座っている男がいる。
コイツがおそらくジョーカーであろう。
「変わろうかい？岡田さん」

「大丈夫です」
「（息一つ切らせていない。さすがだな～）」
２０人が一斉に攻撃を仕掛けてきた。
だが、目にも留まらぬ速さで敵を倒していく。
「（無人の野を往くがごとく歩を進めるか……すごいぜ岡田、いや、夜叉……ますますアンタとタイマン勝負がしたくなったぜ）」
「うおおお！！」
残すところあと七人とジョーカーだけだ。
「あのジョーカーも強いな～」
翔の言葉に驚くニーナ
「ほ、本当ですか？」
「ああ、俺も数多の修羅場を潜ってきているのでね～。見ろ。奴は仲間がやられても表情を変えず、不動の心を持って、微動谷しない。動けないんじゃね～。あそこから岡田の戦いを見て、どう戦うか知ろうとしっている」

１時間半後……
ボロボロになりながらも、５０人を鎮圧した。
残るはジョーカーだけだ。

「岡田、ボロボロだな」
「ま、まだまだ、大丈夫です」
「無理するな。今度はお前がニーナを見ていろ」
「いえ、アイツは僕が倒します」
「分かった。だが、条件がある」
「なんですか？」
「お前が奴に勝ったら、俺と本気で戦うこと」
「しかし」
「いやなら、いいんだけど。俺がアイツ倒す事になるけど」
「……ニーナさんにはいろいろとお世話になった身。だから、アイ

ツは僕が倒す。そして天神流２５代目(あなた)継承者も倒します」
その言葉に翔はうっすらと笑った。

「いいのかい？男女ども。俺は二人でも構わないぞ」
「僕が戦う」
「そうか。なら負けた時はニーナはいただくいいな」
「ああ、だが、僕は負けない」

こうして二人の戦いが始まった。
男はかなり体格がいい体つきをしていた。
さらに、大きな体格なのに速さもあった。
そして先に攻撃を仕掛けたのは、ジョーカーだ。
電撃を放ち避けた方へ神速で間合いに入り込む。
拳を凍らせて、そのまま顔面を殴り続ける。
「どうした。フーアム。この程度か？」
「ま、負けられない……僕が負ければニーナさんが」
今度はラリアットが決まった。
「ぐわ～」
「翔さん」
「大丈夫だよ。俺の約束は置いといて、恩ある君を守る。そのために奴は勝つ（だが、今のままじゃ無理だ。いい加減正体を見せろ）」
「ハアハア……」
「何だ。もう終わりか？ならニーナは俺のものだ」
「お、おい、まだ勝負は付いていないぞ」
なんとジョーカーはニーナのところへ歩み寄った。
「翔さん」
と、岡田が叫ぶが、翔は見てみぬふりをした。
「さあ、キスしよう」
「い、いや～」

ニーナの家では……
「娘が危ない」
「翔さんは何故止めようとしないのだ」
とジュピターが言った。
「あの方にはあの方の考えがあるんだと思うわ」
と、マルスが言った。

二人の唇が重なるまであと1寸　（約3センチ）だ。
「やめろ！クソ野郎が！！」
岡田の声でジョーカーの動きが止まった。
「（ん、何だ！？気の質が変わった！？）」
「（チンピラ3人を倒した時と同じだな。目付きは鋭く、口調も荒く、気の質が変わった）」
「本当は人斬りなんて辞めると誓ったの……いいか、今から相手するのは人斬りの夜叉だ」
そう言って刀を抜いた。
「ジョーカー、夜叉（アイツ）と修羅（オレ）を敵にしたときから、お前は負けていたんだよ」
「な、舐めるな」
そう言いながら、手から大きな炎を出そうとした。
飛び道具のない岡田には相手の間合いに入るのは至難。
だが、彼は右手に鞘を左手に刀を持ち、鞘と刀を大きく振った。
そして離れていたジョーカーの首筋を掠めた。
「うっ……血が……」
「かまいたちか」
「えっ？」
「神速で鞘と刀で真空波を作ると、かまいたちと呼ばれる現象が起きるんだ」
「どうするんだ？ジョーカーまだやるか？」
「当たり前だ」

「そうか」
そう言って刀を鞘に納めた。
「ん？抜刀術か？」
と、翔は小声で言った。
そして馬鹿みたいに突進してくるジョーカーに、刀など抜かず、右上段回し蹴りが決まった。
「フン」
「す、すごい……」
「ま、負けた……この俺が……」
「お前は弱くはないただ夜叉強（コイツ）すぎただけだ」
その言葉にジョーカーは微笑んだ。
しばらくして、ブーギョ隊が駆けつけ、全員連行された。
また、ハニーを残し、他の戦士たちもやってきた。
「さて帰りますか」
と、岡田が大声で言った。
「待て」
「ん？」
「俺との約束は？」
「あっ……まあ、約束を守らねば行かんな」
「物分りがいいね」
「本気で戦います。ですから死なないでくださいよ」
「お前もな」
「ちょっと二人共」
「ニーナさん。本当にスイマセン。平穏に生きたかったのですが、戦いの世界へ足を踏み入れたものが、そう簡単に平穏に暮らせないみたいです」
「ああ、その通りだ。俺も女を捨ててまで、修羅道に生きる」
「あと、僕が負けたら、あなたたちの仲間に加わりますよ。でも僕が勝ったら、仲間に入れてください」
「なんだよ。用は付いてきてくれるって事だろう。ありがたいね～」

なんとジョーカーたちの戦いを終えなのに、修羅と夜叉が戦いを始めた。
果たして勝者はどちらにあるのか？

第１２章　父を探す少年

町から少し離れたところ

修羅と夜叉の戦いが始まった。
だが、半次郎は刀を抜かず鞘だけで戦っていた。
この戦いをハニー以外の戦士と、ニーナは静かに見守った。

「どうした岡田、いい加減刀を抜きなよ」
「僕はもう人斬りじゃないんで」
すると翔は日本語でこう彼に言った。
「アンタが人斬りをやめたのは、あのニーナって娘に一目惚れしたからだろう？」
その言葉に岡田の顔が赤くなった。
「そうですよ。僕は魔法世界に来るまで、人を斬る事に歓喜してました」

岡田が初めて人を斬ったのは彼が１６歳の時だ。
ある男に、自分の武術の師匠を殺され、仇を討ったときが最初出会った。
師匠の刀を持ち、その刀で師匠を殺した相手を斬り殺した。
その後彼は、人を斬る事に歓喜を覚え、大金さえ出せばどんな相手でも斬り殺してきたのだ。
ジャッキー・リーを除いて唯一殺せなかったのが天神流１７代目、月形瑠奈である。

「だが、君はこんな戦い方じゃ気にいらないようだから」
そう言って、ついに刀を抜いた。
間合いを取り、正眼の構えから袈裟斬り……

と、思わせておいて、右足で鳩尾に前蹴りを放っていた。
「いいね～」
だが、翔には通じなかった。
後ろに下がり、蹴りを避けたのだ。
「刀で攻撃すると見せて、蹴り技で来るのはいいが、多くの修羅場を潜ってきた俺には通じないな」
「そうみたいだね（本気で行くよ。２５代目）」
そう言って、ジョーカーの時と同じように鞘と刀を神速で真空波を作り、かまいたち現象で翔に攻撃をした。
だが、彼女は高く跳び交わした。
さらに着地をすると、神速で岡田の間合いに入り、左腕の逆関節を取り、そのまま地面に叩きつけ、同時に岡田の喉にかかと落としをしたが、岡田も紙一重で交わした。
「さすがだね～。雷鳴を交わすなんて」
「天神流の者と一度戦っているからね」
「嬉しいね～」
岡田はすぐに立ち上がった。
二人は薄っすら笑った。
だが、その時、ハニーが慌ててやってきた。
「ニーナさんのお母様が水晶玉で町の騒ぎに気づいた物だから」
「騒ぎ？」
「まだ１５くらいの子が、二人の男に殴られているのよ」
「どうする２５代目。僕はその現場に行くつもりだが」
「……俺も行くよ」
二人は戦いを中断し、騒ぎのある場所へ一行は向かった。

「餓鬼が調子に乗っているんじゃね～ぞ」
「す、すいません」
「声が小せ～」
そう言って男は少年を殴った。

翔たちは野次馬に何が起きたのかを聞いた。
どうやら少年はガラの悪い男から財布を掏ったのだ。
そのためもう一人のガラの悪い男と二人がかりで、殴るなどの暴行を行なったのだ。
この二人はリーザ団という地上げ屋だ。
だが、マルスやジュピターがその少年の姿を見て驚いた。
「マーキュリーちゃん」
「ヴィーナ様……」
「何だ。知り合いか？」
「はい。同じ地下で暮らした仲間です。でも、兄と共に地上へ行ったはず」
「オラ、まだこっちは許してないんだ」
「おい、あの女どもを俺たちのものにしようぜ」
「いいな～それ。ん？コイツ、ジョーカーが狙っていたニーナとかいう女だぜ」
「マジ、マブイじゃん」
だが、そんなこと岡田が許さない。
「なんだ？邪魔する気か？」
「痛い目に会いたくなければ、もう去れ。あの少年をあそこまで殴れば気も済んだだろう」
「ああ？」
その時、翔が男の一人を殴り飛ばした。
「ドード、大丈夫か？」
「あっ……あっ……い、痛え～」
「お前も殴られたいか？」
「うっ……（何だこいつの目は……）クソ！覚えておけ！俺たちリーザ団にはむかった事後悔させてやる。
そう言って二人は去っていった。
「大丈夫？」
「はい。このくらいの怪我なら自分で治せます」

マーキュリーは回復系の魔法が少し使える。
彼の夢は医者になって、自分の魔法で多くの患者を治したいという志があった。

「兄様……アポロンはどこにいるの？」
「今はどこにいるか分かりません。でもあの方はとんでもない事をしようとしています」
「とんでもない事？巨人の事か？」
と、翔が訪ねた。
「いえ、百年前に死んだ魔王を蘇らせようとしています」
「何ですって！」
「僕は地上を支配するために、アポロン様にご同行したわけじゃありません。母が亡くなる前、僕の父親がまだ地上で生きているかもと教えてくれたからです」
「地上って、どこの国にいるのか知っているのか？しかも生きているかもって事は死んでるかも知れないんだぜ。名前は分かるのか？」
と、翔が勢いよく質問してきた。
「僕がまだ生まれる直前に、母と別れたのがこの国らしいのです。名前は確か、バータ・クレス」
その名前を聞いていた野次馬の町の者たちの顔つきが険しくなった。
「何だ？あんたら知っているのか？」
「さ、さあな」
そう言って、野次馬たちは去ってしまった。

その頃リーザ団のアジトでは
バキッ！
ボコッ！
「ウッ……」
「ガハッ……」
リーザ団の頭リーザが帰ってきた二人を殴った。

「情けない人たちですね。餓鬼に舐められて帰ってくるなんて」
「スイマセン」
「そいつらに御礼をしなければいけませんね……バータ、ドードとリーアを連れて、お返ししてきなさい」
「はい」

なんとリーザ団にマーキュリーの父親と同じ名前の者がいた。
果たしてこの男こそが、マーキュリーの父親なのだろうか？

第13章　バータ・クレス

戦士たちはニーナの家に集まっていた。

「マーキュリーちゃん、どうして擦りなんてしたの？」
とマルスが険しい顔で尋ねた。
「僕、盗んだんじゃないんです。財布をあの人が落としたから渡そうとしたら、因縁つけられたんです」
「信じていいわよね」
「はい」
その返事を信じ、マルスは微笑んだ。
「それよりもお兄様が魔王を復活させようなんて……」
「今お母様が占っているわ」
だが、ニーナの母親の体調が悪くなってしまったため、彼女を寝かせた。
「マーキュリーちゃん、お兄様とはこの国で分かれたのよね」
「はい、巨人が動かせないなら魔王を復活させる……そう言っていました。僕はアポロン様にこの国で父を探したいとお願いし、その後アポロン様たちがどこへ行かれたかはわかりません」
その時だった。
翔が微笑んだ。
「コイツが絡まれていた場所から強い気を感じる。地上屋（あいつら）がどうやら大将を連れてきたみたいだ」
そう言って、戦場へ向かおうとした。
「僕も行くよ」
と、岡田が言った。
「人斬りじゃない夜叉（あんた）は邪魔だ。変わりにあんたの師匠の刀（かたみ）を貸せ」
「私はいくわ」
と、ハニーが言った。

さらにマルスやジュピターまでも……
「翔さん、一人では何をするか分かりませんから」
ハニーのその言葉に翔は何も言えなかった。
「僕はニーナさんや岡田さんと共にニーナさんのお母様の看病をしています」
と、ゴットンが言った。
こうして翔、ハニー、マルス、ジュピターの四人がリーザ団のいる場所へ向かった。

バータたちのいる場所……

「あの餓鬼共どこへ言ったのでしょう」
「安心しろ」
「えっ？」
「ものすごく強いエナジーを持った者がもうすぐ来る」
「は、はあ」

そして、戦士たちはバータたちの所へやってきた。

「あいつです。バータさんと同じように左頬に傷を付けている奴です」
「女？男なのか？」

バータの左頬にも傷がある。
また、彼は布をバンダナのように頭に巻いている。
この布、元は白色だったが、相手の返り血や自分の血で赤く染まっていた。

「お前が、こいつらの大将か？」
と、微笑みながら翔が尋ねた。

「われらの対象はリーザ様だ。俺はその人の子分、バータ・クレスだ」
その名前を聞いて四人は驚いた。
「バータ・クレスだと……じゃ、じゃあ、お前がマーキュリーの親父か？」
「マーキュリー？誰だそいつは？」
「誰って、お前の息子だろうが！」
「翔さん、あの方とマーキュリーちゃんのお母様は、マーキュリーちゃんが生まれる直前に分かれたのですよ」
マルスが言った。
「そうだった」
「……おい、小僧！俺の息子と言ったな。生きているのか？」
「ああ、親父（あんた）を探していたぞ」
「そうか……チーデルンも生きているんだな？」
「チーデルン？」
「俺の妻……そのマーキュリーという奴の母親だ」
「死んだみたいだ」
「何！」
「死ぬ前にマーキュリーに父親がこの国で生きているかもしれない……そう言って死んだみたいだ」
「そうか……残念だ」
「そんな事よりマーキュリーも可哀想だよな。やっと見つけた親父が地上げ屋だなんてよ」
「フッ……俺はこの国で妻と別れたんだ。マーキュリーには親父は死んでいたと伝えてくれ」
「それがいいかもな。あいつはアンタと違い医者になるという夢を持っているんだから、その夢が叶ったとき、世間から親父が地上げ屋だったなんて言われたら、それこそ可哀想だ」
「ああ……（それにしても俺と違いまともに生きてるんだな。感謝するぜ。チーデルン）」

「さて、話はここまでだ。勝負しようぜ。あんたもそのつもりで来たんだろう」
「翔さん！」
とマルスが大声で呼んだ。
「邪魔するなよ。俺は修羅だ。強い奴と戦いたい。それだけだ」
「面白い小僧だ。だが、用事を思い出した。勝負はまた今度だ。戻るぞ」
「えっ？は、はい」
「待ってください」
とマルスが大声で呼び止めた。
「私たちは今、とんでもない人たちと戦おうとしています。そのために強い人を探しています。どうかあなたの力を貸してください」
「フッ……悪人にそんなこと頼むなよ。それにそこの男女がいれば大丈夫だろう」
「ですが……」
「そんなことどうでもいい、今すぐ俺と勝負しろ！」
「小僧、名前は？」
「大空翔だ」
「大空翔かいい名前だ。マーキュリーのこと頼んだぞ」
そう言って3人は去っていった。

戦士たちもニーナの家へ戻っていった。
4人はマーキュリーにバータのことを話そうかどうか迷ったが、とりあえず今は知らせない方がいいと判断し、4人だけの秘密となった。

それから1時間後……

「バータ、もう一度言いなさい」
「もうリーザ団を解散させ、地上げ屋をやめましょうと言ったので

す」
「……バータ、あなたは亡き兄の友人、今のは聞かなかったことにします」
「なら、私だけでも抜けさせてもらいます」
「そんなことをすればどうなるか、あなたが一番知っているでしょう」
「はい、脱退したものは死刑」
「ならば、馬鹿なことは考えないように、あなたは兄の友人だけという理由でかわいがっているのではありません。あなたのその強さを私は高く評価しているからですよ」
「ありがとうございます」
「もういいです。下がりなさい今度は私が行きます」
「はっ、失礼します」

リーザ……フルネームはリーザ・コールド。
父、母、兄はすでに他界している。
兄の名前はクラーン・コールドといい、バータの悪友であった。

第１４章　父親として……

次の日、町は大騒ぎになっていた。
リーザがなんと、町の者たちを追い出そうとしたからだ。
何の保障もなく突然の出来事だ。
もちろんリーザの本当の狙いは翔たちだ。
そのため町の者たちは翔たちを町から追い出そうとした。
彼らは旅人だからいいが、一番困るのは、ニーナ母子（おやこ）だ。
しかもニーナの母は病んでいる。

「出て行け、この疫病神が」
「そうだ」
「お前らのせいだぞ」
「出て行かないなら、俺たちの手で殺してやる」
その言葉に翔が出てきた。
「うるさいぜ。中には病人もいるんだ。リーザとかいう奴に臆して何も出来ないくせに、えらそうにしやがって、これ以上騒ぐなら、俺が相手だ」
そう言ったときの彼の顔はまさに修羅だ。
「うっ……なんて目をしていやがるんだ」
「こいつ、リーザより恐ろしいかも」
「リーザのアジトは分かった。俺が今から奴らを一網打尽にしてくる。それで問題ないな」
「あ、ああ……」
「だ、だが、無事帰ってこれるかな」
「ああ？」
「うっ……なんでもね～」
「岡田、また刀借りていくぞ」
「はいはい」

「私も行くわ」
「私も」
「僕も」
と、ハニー、マルス、ジュピターが言った。
「しょうがね～分かったよ」
こうして、この前と同じ４人で行くこととなった。

リーザ団のアジト
「その頬に傷を持つ男女は私が殺ります。他はバータに任せますよ」
「はい」
「頼りにしていますからね」
そういいながら不気味に微笑んだ。

そして、４人が攻め込んできた。

「リーザ、出てきやがれ～！」
外にいる３０人以上の部下をほぼ翔一人で鎮圧させていく。
「ば、化け物だ～」
と、４人の兵士が逃げようとした。
だが、電撃波を喰らい、４人は死んだ。
電撃波を放ったんのはリーザだ。
「やれやれ情けない部下たちだこと」
「お前がリーザか！」
「お前が、バータの言っていた大空翔ね」
「行くぜ」
と、二人が勝負をしようとした時、バータが止めに入った。
「どういうつもりですか？」
「リーザ様、あいつとは約束があります。それにあなたの兄上から、あなたのことを任されています。ですから、あの小僧は私が倒します」

「いいでしょう。あなたの私への忠誠心見せてもらいましょう」
「はい」

こうして翔とバータの戦いが始まった。
翔から笑顔はなく、真剣な表情をしていた。
それは相手が本物の戦士だからだ。

「誰も手を出すなよ。あの小僧の先約は俺だからな」
「はい」
「みんなも下がって見ていろ。あいつは本物の戦士だ」
「うん」
「負けないでくださいね」
と、マルスの言葉に普段なら微笑んだりするのだが、今回は翔も本気だ。

しばらく二人は間合いを取る。
そして、最初に動いたのは、バータだ。
両手から炎を出し翔に放つ。
だが、これくらいなら簡単に交わせれる。
翔は高く跳び交わした。
そして着地と同時に落ちていた石を蹴り飛ばした。
バータはすばやく石を叩き落した。
だが、すでに翔がバータの間合いに入っていた。
岡田の刀を抜こうとした。
だが、その一瞬の隙をバータは見逃さない。
右手を柄に添えた時に、翔の両腕と刀を凍らせた。
だが、彼女の闘気は消えない。
全身全霊を込めた右足で上段蹴りを放った。
だが、体制が悪いため交わさせた。
そしてバータは目の前にいる翔に炎を放った。

「うぎゃ〜！！！！」
さすがに交わすことが出来なかった。
だが、おかげで凍っていた腕の氷が溶けた。
彼女は地面を殴り、その衝撃で砂が飛び散り、炎をかき消した。
だが、上半身の服はボロボロだ。
翔はマージュの時のように、服を破り捨てた。
背中には闘神阿修羅の刺青が彫られている。
「お前、女か？」
「それがどうした」
「お前は本当にすごいよ」
「あんたもな……おもしれ〜な〜」
ようやく彼女の顔が微笑んだ。
「なあ、おっさん。その強さ、人のために使えよ」
と、小声で翔は話しかけた。
「……」
「あんたが人のために何かをすれば、堂々とマーキュリーに父親と名乗れるだろう」
「それは出来なん」
「何故だ？」
「俺はリーザ（リーザ）の亡き兄……俺にとっては悪友の遺言だからだ。奴が死ぬ前に弟を頼むと頼まれたからだ」
「それで、あいつのお守りをしているのかい」
「そうだ。妻に反対されても俺は友情の方を選んだ」
「そうかい」
「だが、我が子が生きていると知ったとき、俺は、リーザ団を辞めるつもりだった。辞めたからって、親父だと名乗る気はない。ただ、いつかお前が言うように人のために役立てれる人間になれたら俺は……」
その時だった。
苛立っていたリーザの指から放たれた光線がバータの右胸を貫いた。

「お、おい」
「ハアハア……大丈夫だ。急所は外れている」
と、言ってもものすごい出血だ。
「マルス、誰でもいい、こいつに回復系の呪文を頼む」
「はい」

「リーザ！」
怒り狂う翔。
「まだ、奴との勝負は終わってね～んだぞ」
「それがどうがどうしたんですか？私は鈍間は嫌いです。それにバータは密かに謀反を加え立てていた」
「うるせ～！！」
「うるさいのはあなたたちですよ。虫けらが」
そう言って、また指先から光線を放とうとした。
だがそのとき、治療中のバータがこう言った。
「や、やめろ。リーザ！そいつには俺もあんたも勝てない」
「死にぞこないが」
「お、お前の兄には世話になった。若いころどじって、俺がぶーギョ隊に捕まったときも、あいつは一人で俺を助けてくれた。だから、あいつの遺言どおり、お前の部下となり、お前に尽くしてきた。だが、やりすぎだ。リーザ。これ以上町の者に危害を加えるなら、俺はクラーンとの誓いを破り、お前を殺す」
「うっ……」
「俺の、最後の願いだ。リーザ団を解散させ、罪を償い、一からやり直すんだ。安心しろ俺も一緒だ」
「バータ……あなたにそこまで言われては解散するしかありませんね」
「ああ」
「翔」
「なんだ」

「罪を償ったら、お前らの仲間になるかどうかは決めていないが、マーキュリーに一日でも早く、自分が父親だと名乗れる人間になってみせる」
「フッ……今のあんたなら大丈夫だろう。いい父親になれよ」
「ああ」

こうしてリーザ団の者たちはすべて捕縛された。
だが、真の敵はアポロンだ。
戦士たちはニーナの母が占うことが出来ないなら他の占い師を探すことにした。

第１５章　魔王復活

占い師探しは他の者たちに任せ、翔は人気のない所で、マーキュリーに稽古を付けていた。
「（オッサン……アンタがいつか人間らしくなったら、名乗るんだよな。俺もその時までに、コイツを少しは強くしとくよ）」

「ハアハア……」
「どうした！もうお終いか？そんなんじゃ俺たちのように強くなれんぞ！」
「は、はい」
マーキュリーにはアポロンたちと戦うため、強くしてやると翔は答えていた。

「クソ！」
「ほらほら、もっと腰を入れて」

「ハアハア……」
「今日はここまでにしよう。お前風呂に入って来いよ」
「は、はい」

ザブーン！！
と背中に湯をかけ、風呂の中に入っていった。

その時、翔も入ってきたのだ。
マーキュリーもすでに彼女が女だと知っている。

「何だ？何恥ずかしがっているんだ？」
「えっ……それは……」

「ハッキリいいな」
「スイマセン。女の方と一緒にお風呂なんか入ったことないから」
「お前、チェリーか？」
「はい」
「まあ、いい。悪いが俺の背中洗ってくれるか？」
「は、はい」
彼女の背中には闘神阿修羅が彫られている。
「これがあしゅら……」
「ああ、武器も持たず、戦いに身を置く神だ」
マーキュリーはしばらく阿修羅の入った翔の背中を見ていた。
だが、彼が一番気になるのは背中の阿修羅ではなく、翔の胸元だ。
「（柔らかそう）」
「どうした？」
「い、いえ」
「俺の胸でも触りたいのか？」
「はい！」
と、勢いよく返事をしてしまった。
「クスッ……お前素直で可愛いな」
「えっ？」
翔は彼の両腕を握り、自分の胸を触らせた。
「柔らかい」
「もっと強く揉んでいいぜ」
「は、はい」
マーキュリーは翔の前へと体勢を変えた。
「ん、舐めてもいいですか？」
「どうぞ」
翔のおっぱいを優しく吸うマーキュリー。
その姿は赤子のようであった。
そして翔は優しく見守った。
いつもは修羅のような表情をしているが、この時だけは菩薩のよう

な顔をしていた。

そして、とある場所では……
連れてこられた男はすでに骸となっていた。
死者復活の術を始めてから1週間くらい経っていた。
魔方陣の上には男が一人裸で座っていた。
そう、ついにアポロンたちは魔王を甦らせたのだ。
ヴィーナが蘇ったため、彼女を吸収する前の姿だが、まぎれもなく、
ビルダー魔王だ。

第１６章　翔女に戻る

ある場所で、ついに魔王が蘇った。
「貴様らか？俺様を蘇らせたのは？」
「そうだ」
「何故だ？」
その言葉にアポロンは薄っすら笑った。
「魔王（あんた）の全てをもらうためさ」
「何？」
そう言って、お互い吸収の術を使い始めた。
「餓鬼が俺様を吸収できると思うなよ」
「もう魔王（あんた）の時代は終わっているんだ」

その頃翔たちはリーザ団を見事鎮圧し、町の英雄になっていた。
だが、新たな事件が起きた。
翔の様子がおかしいのだ。
３時間くらい前に、ある人に手紙を出すついでに、ロードワークに出かけて、帰ってきたのだが、彼女の様子がおかしいのだ。

「翔さんがどうかしたのですか？」
と、仲間に聞くゴットン。
彼も教会へ出かけていたため、翔の様態を知らない。
「翔さんが、翔さんじゃなくなってしまわれたのよ」
と、マルスが言った。
「はあ？」
その時、ニーナの服を借りて、化粧までした翔が二階から降りて来た。
誰もが驚いた。
「どう似合うかしら？」

「翔さん！」
「ヴィーナちゃん、私の名前は佐奈、楢崎佐那よ」
「どうなってしまったんだ。２５代目」
「半次郎さん、私もあなたと同じ。戦いなんてもうしないで、恋をして平和に生きるの」
「本気か？」
「もちろんよ」
翔……いや佐奈の姿を見て一人だけ、違う目線で彼女を見ていたものがいた。
バータの息子のマーキュリーだ。
彼は共に風呂に入ったときから、彼女に好意を持ち始めていたのだ。
「（綺麗です。ああ、でもこの想い臆病者な僕には伝えれない）」
さらに気になるのが、彼女が手紙を出した相手が誰なのかも謎だ。
彼女に聞いても「ひ・み・つ」としか言わないのだ。
だが、その時、ゴットンが何かを思い出した。
「もしかしたら、巨人の近くにある水道水を飲んだのかも知れない」
「どういうことですか？」
と、マルスが聞いた。
するとニーナが答えた。
「巨人の近くに一つだけ呪いの掛かった水があるのです。私たち地元の者はその水の正体を知っているから、誰も飲みませんが、よその方はよく飲んでしまうんです。もちろん壊そうという声もあったがのですが、呪いが掛かっているため、そのままにしてあるのです」
「それで、その水を飲むとどうなるのですか？」
と、ジュピターが聞いた。
「人によっては男なのに女と思い込んだり、また、他にも自分が最強だと思い込んだりするようです。翔さんの場合は女を捨てたはずが、水を飲んだため、今は自分が完全な女性だと思い込んでいるようです」
「直す方法は分かりますか？」

と、マルスが聞いた。
「分かりません。ただ、自然に治った人も何人かいます」
「じゃあ、自然に治るのを待つしかないのね」
「はい」

魔王が復活したのに、翔が戦いを嫌う女性になってしまった。
果たして彼女は元に戻れるのだろうか？

第17章　修羅場

完全に翔はいや、佐那は女性になってしまっていた。

「なあ、もう一度水飲ませたらどうかな？」

と、半次郎が冗談交じりで言った。

「あれ、25代目は？」

巨人の近くにある公園……

ここで、マーキュリーが一人武術の稽古をしていた。

そしてその姿を佐奈は見ていた。

「ふう……」

「お疲れ様。はい、タオル」

「あ、ありがとうございます（やっぱ今の佐那さんは綺麗だな～）

あの佐那さん」

「なあに？」

「あっ、あのう……僕貴女のことがその……なんでもないです」

「気になるよ～。教えてよ」

「ぼ、僕、佐那さんが（勇気を出せマーキュリー）す、好きです」

その言葉に二人の顔が赤くなった。

「そ、そうなんだ」

「迷惑ですよね」

「そんなことないわ。嬉しいよ」

「じゃ、じゃあ」

「でも、本気で考えたいから少し時間がほしいわ」

「も、もちろんです」

その頃、この公園の近くで、アポロンの仲間の3人がマルスを探していた。

「ん？おい、マーキュリーだ」
「本当ですわ」

そして3人はマーキュリーと佐奈の前に着地した。

「あ、あなたたちは……」
「誰？知っている人？」
「はい。アポロン様の同士です」

風の魔法と剣術を得意とするウラヌス。
水の魔法と小柄な女性でありながら、怪力を持つネプチューン。
大地の魔法と冷酷な強さを持つサターン。

ニーナの家……

「ハアハア……」
「お母様？」
休んでいたニーナの母が突然起きた。
「このままでは翔さんたちが危ない」
「えっ？」
彼女は予知夢で翔たちのピンチを予知したのだ。
「巨人の近くの公園ですか」
といい、マルスは出て行った。
「マルス様」
ジュピターも後を追った。
「ゴットン。ニーナさんとおばさんを頼む」
半次郎も二人を追った。

「神よ、彼らにご加護を」
と、祈るゴットン。

巨人の近くの公園

「マーキュリー、父親は見付ったか？」
「い、いえまだです」
「我らに本気で手を貸せば、すぐに見つけてやるぞ」
「僕は、あなたたちとは違う。この世界を支配したいなんて思わない」
「そうか。なら言う事を聞くよう、少し痛めつけるか」
「マーキュリーちゃん」
「だ、大丈夫です。佐那さんは僕が守ります」
震えながらも彼は力強く言った。

「お前の女か？」
「あらあら、いつの間に」
「言う事を聞かねば、その娘も痛い目にあうぞ」
「なっ！この人は関係ない！」
「ネプチューン、この女を痛めつけろ」
「はい」
「マーキュリー、サターンは本気だぞ」
「やめろ～！！！」
そう言って、サターンに襲い掛かった。
「馬鹿が！俺に勝てると思っているのか？」
サターンのパンチが顔面にヒットし、マーキュリーは吹っ飛んだ。
だが、彼はすぐに立ち上がった。
「何！」
「手加減したとはいえ、サターンのパンチを喰らって、あの弱虫マーキュリーが立ち上がっただと」

「僕はもう弱虫なんかじゃない」
「そうか……なら本気で」
「お、おいサターン」
「マーキュリーちゃん、逃げて～！」
「お黙り！」
といって、ネプチューンが翔を叩いた。
「その人に手を出すな～」
「喰らえ！マーキュリー！！」

その時だった。
マルスたち3人がたどり着いたのだ。

「マルスさん……それにジュピターさんや半次郎さんまで」
「ヴィーナ……探したぞ。俺たちはアポロンの使いで来た。お前に伝言だ。俺たちに力を貸せ。もちろんマーキュリーとジュピターもだ」
「お断りします。それに今の私の名前はヴィーナではなくマルスです」
「そうか……これもアポロンから頼まれたことだ。断れば、殺せとな」
「マルス、ジュピター、僕に何かあったら、ニーナさん親子をよろしく」
「えっ？」
「師匠以外で心許せる仲間がで来たこと、すごく嬉しいよ」
「半次郎さん」
「今は岡田半次郎じゃない。人斬り夜叉だ！」
そう言って、刀を抜いた。
「変わった刀だな。サターン、アイツは俺にやらせてくれ」
そう言って彼も剣を抜いた。
「行くぞ！」

「来い」
半次郎は鞘を使い、かまいたち現象を起こした。
だが、風使いのウラヌスには効くはずがなかった。
「夜叉とかいったな。面白いなお前」
「お前もな」
今度はウラヌスが攻撃を仕掛けた。
カキーン！
と、ウラヌスの攻撃を受け止める半次郎。
だが、ウラヌスは竜巻を起こし、半次郎を高く飛ばした。
そしてウラヌスは半次郎目掛けて跳んだ。
そして、彼の右下腹部を貫いた。
普通なら何が起きたか分からないまま、終わりだろう。
だが、今の半次郎は人斬り夜叉だ。
貫かれたと同時に、ウラヌスの左腕を斬りおとしていたのだ。
そのまま二人は着地した。
ウラヌスの左腕からと、半次郎の腹から大量の血が流れる。
だが、二人は戦いをやめようとはしない。

すでに深夜を回っていた。

その時、あの男が現れた。

「本当は戦いが終わるまで、おとなしくしているつもりだったんだが……」
「ゴットンさん！？いや、違うマージュさんね」
「ああ……さて、俺の相手は一番偉そうにしているアイツだ！」
そう言って、マージュはサターンに攻撃を仕掛けた。
彼の顔を目掛けて、全身全霊のパンチを放った。
だが、サターンは片手で受け止めた。
だが、それでもサターンは吹っ飛んだ。

「どうした？大将」
「ぐっ……」
「あのサターンが吹っ飛ぶなんて」
と、ネプチューンが言ったと同時に、今度は彼女が殴られ、吹っ飛んだ。
吹っ飛ばしたのは、翔だ。
「佐那さん！？」
「ハアハア……私はもう戦いなんかしたくないはずなのに……普通の女として生きていくつもりだったのに……これ以上私の前で戦いを続けるなら、敵も見方も関係なく、ぶっ潰す」
元に戻った訳ではないが、そのセリフと恐ろしい目付きはまさしく天神流２５代目大空翔だ。
「クッ……ネプチューン、ウラヌスここは一度引くぞ」
「あ、ああ」
「（まさかこんな化け物たちがいるとは……やはりアポロンに頼るしかないか）」

今までの修羅場が嘘のように公園内は静まった。

「半次郎さん、今回復系の魔法で治します」
「す、すまない」

「佐那さん……」
「マーキュリーちゃん、私は修羅……戦いの中でしか生きられない」
「……なら、僕も修羅となり、貴女と共に戦いの中で生きていきます」
「マーキュリーちゃん……ありがとう。こんな女を好いてくれて」

戦いはまだ始まったばかり。
そして、マルスをはじめ、ここにいる戦士たちは全員アポロンの敵

となったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2734w/

マジカルワールド３

2011年10月19日02時14分発行